

計測器校正の勘どころ

歴史編(第 1 回)・WTO/TBT 協定と ISO9001

アンリツ計測器カスタムサービス株式会社
計測標準センター
山崎 俊雄

《はじめに》

前回の制度編では、検査等事業者制度について説明をいたしました。前回ご紹介した「測定の不確かさ」の概念は比較的新しい考え方であり、この 20 年あまりの計量管理の国際化の進展により普及したものです。今回より歴史編と題して、計測器の管理が必要になった歴史的背景をご紹介します。どうかお付き合いください。

1. 世界市場を統合する国際化の波

およそ 20 年前、思い起こしてみれば様々な事件、事象がありました。1993 年、欧州連合条約が発効。国内では細川内閣が誕生。ウルグアイ・ラウンドの合意による米のミニマムアクセスの問題に苦戦していたのもこの時期でした。このころ既に世界の枠組みは大きなうねりを従えて動きだしていたのです。

この時期までの世界的な貿易に関する問題の処理は、主に GATT(関税および貿易に関する一般協定)の場で討議されてきました。GATT は長い間、直接の利害関係を有する国同士が多国間で交渉する形態を取ってきましたが、より高い次元で包括的に世界貿易を促進する必要性が生じたことから、GATT を発展拡大させる形で WTO(世界貿易機関)協定が締結されることになりました。1995 年には WTO が正式に国際貿易の調整機関として登場することになります。

2. WTO/TBT 協定の発効

WTO は多角的な貿易交渉の結果を実現する機関としてその役割を期待されていましたが、WTO 発足の前年には GATT スタンダードコードを改訂する形で TBT(Technical Barriers to Trade)協定が締結されます。これは、国際貿易を行う上で、主に技術的な貿易障壁を取り除くことを目的とするもので、具体的には工業製品等の規格を整合させること、また規格への適合性評価手続きが不必要な貿易障害とならないように適切な対応を行うことでした。

これらを実現するために、各国は国際規格を基礎とした国内規格策定を推し進め、規格、適合性確認の透明性を確保する施策を実施することになりました。

3. 品質マネジメントシステムの普及

このような国際情勢を受けて、日本でも各種の国内規格を国際規格に整合させる動きが加速します。品質マネジメントに関する国際規格 ISO9001 が国内で急速に普及しはじめたのは 1990 年代のことですが、ISO9001 は品質規格の異なる国や地域同士での工業製品や部品の取引に関して、供給者が仕様を満たすことの信頼性を担保するために制定されました。その発祥起源は実に 1970 年代以前にまで遡ります。

実際に、ISO9001 では、企業が保有する計測器の管理に係る要求事項が含まれており、これがその後の製造業を中心とする企業の生産活動に大きな影響を与えるようになります。最終製品の品質に影響を与える計測器は、原則として適正な間隔で定期的に校正を実施して再評価(再格付け)することが、明確に要求されるようになったのです。

4. 非関税障壁を取り除くための計測器管理

そもそも、計測器の校正はなぜ必要なのでしょうか。それは、工業製品や部品が仕様を満たしていることを確認する手段となる計測器の指示する値が、国際的な基準に照らし合わせて十分信頼できることを確認するために他なりません。実際に、輸出入される工業製品や部品が本当に仕様を満たしているか否かを十分に確認できない場合には、これらに対して都度受入のための再評価が必要になるかもしれません。

このような再評価の手間が貿易上の非関税障壁とならないよう、世界市場に製品を送り出す国には、一層の国際協調が求められています。今回は、このための国際協調体制の整備についてご紹介します。

チェック!

世界市場の一体化の動きは 1990 年代前半より加速します。WTO/TBT 協定の発効は、国内規格と国際規格の一体化に拍車を掛けました。国際規格 ISO9001 の普及が計測器の管理に大きな影響を与えました。